

「破れ口で主の前に立つ時」

黒木 安信

今、20 年前の、「ウェスレアン・ホーリネス教会連合」創立総会・記念大会のチラシを手にして、深い感謝と感慨に満たされています。その日は 6 月 29 日で、国家の不当なホーリネス弾圧事件が起こって満 50 年の記念日でした。

日本基督教団では 1967 年のいわゆる「戦責告白」以後、反万博紛争、信仰告白への関わり、教会会議や教師検定制と其の実施等に乱れと混乱が生じ、当時の教団内「ホーリネスの群」はその対応を巡って意見の相違を来たしていきました。1987 (昭和 62) 年のホ群春の年会は、「教会連合」を別組織とする決議をし、翌 1988 年春の年会は、「教会連合」は群に属さないこと、そして東京聖書学校の運営からも「教会連合」を分離する決議をいたしました。その年、このことを憂慮して「ホーリネスの群」の中に、「ホーリネス福音同志会」が結成され、東京聖書学校を自主退学した生徒たちを何としてでも受けとめ、その献身の生涯を見守るべく「教会連合」の教師たちと幾度となく祈り、熱心に協議を重ねていきました。

そして同年 5 月、主の奇しき御摂理の下、何もない中から、「ウェスレアン・ホーリネス神学院」が誕生しました。そして三つの寮体制の下 (淀橋教会、連合ホーリネス中央教会、浅草橋教会)、浅草橋教会を教場に授業が継続されていきました。何もない中からのスタートでしたが、あったのは聖書的ホーリネス信仰の純正を貫き、生きること、そのための真実な伝道者を養成していくという熱き思いでした。

諸変遷を経て、今日、教団ビルと神学院教室、寮が与えられていることは、今は御国にある諸先輩や全国の教団の諸教会、諸兄弟の篤き祈りと尊い献げものに負うところが甚大です。捕囚後の指導者エズラが、恵み深い神の「恵み溢れるその御手が差し伸べられた」(エズラ 8・22) ことを賛美したように、私たちの感謝も尽きません。

問題はこれからです。形は一応、整ってきました。人材も加えられつつあります。教会・伝道所の数もスタート時に比べるなら、飛躍的な祝福をいただいています。問題は私たちお互いが、ウェスレアン・ホーリネスを標榜するにふさわしい内実をどれだけ備えているのかというこの一事に尽きます。

教団問題の事の始まりは、信仰がその内実を失い、歪められ、形骸化していったところにありました。今こそ私たちウェスレアン・ホーリネスの同士は主の聖前にへりくだり、聖書的ホーリネスの実質ある信仰と実践に祈りを篤くし、互いに愛し合いながらキリストの教会形成と福音宣教に奮い立って進むことでもあります。何よりも主御自身がそのことを私たちに切に求めておられることでしょう。

キリストへの「犠牲」(パッション) のないところに、「聖なる熱情」(パッション) は生まれません。「主は彼らを滅ぼすと言われたが、主に選ばれた人モーセは破れを担って御前に立ち、彼らを滅ぼそうとする主の怒りをなだめた」(詩編 106・23) と御言葉にあります。「破れを担って」とは、「破れ口」(口語訳、閩根訳: 𠵼𠵼) のことで、モーセはそこに身を置いて主の前に立ったということです。

創立 20 周年記念を感謝するこの日、私たちお互いも教会のため、教団のため、神学院のためにそうありたいと願わずにおれません。主にハレルヤ!